
かくれんぼ(鬼の男編)

樋浦蓮斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かくれんぼ（鬼の男編）

【Nコード】

N0131P

【作者名】

樋浦蓮斗

【あらすじ】

以前書いた、かくれんぼ（日本代表への道のり）を鬼目線でリメイクしたような感じです。

（前書き）

出来ることなら、前作のかくれんぼ（日本代表への道のり）を先に読んで頂きたいです。

『西暦2060年、オリンピックの正式種目に、かくれんぼが採用されました。』
テレビのニュース速報が流れた。

次の日…各メディアでは、来月に日本代表を決める大会が開かれる事が報じられた…

今日は月曜日…週に一度の休みの日だった。

「ふあゝあゝあ」

大きなアクビしながら、僕は布団から出た。

眠い目を擦りながら、コーヒーをいれた。

猫舌の僕はコーヒーをそのままにし、ポストに新聞を取りに行った。新聞を取り出すと、「パサッ」という音。

足下に目をやると、一通の封筒が落ちていた。

「なんだろう？」

部屋に戻り、軽い気持ちで開けてみる。

『かくれんぼの大会の鬼をやってくださいませんか？』

そう記された文の下には、電話番号が書いてあった。

「…やるか、やらないかは別として、とりあえず電話はしたほうが良いかな」

お人好しな僕。

きつとこういう人間が詐欺とかに引つ掛かってしまっただろう。

自分でもわかつてはいるが、この性格はなかなか直せなかった。

電話をかけると、担当の人だかが出たので、何故僕が選ばれたのか聞いてみた。

「去年あなたは県のマラソン大会で、優勝しましたよね？」

「ええ…まあ一応」

「この大会の鬼は、非常に体力を使う仕事なんですよ」
そういうことか。

「一応謝礼もお支払いしますし、引き受けてくれませんか？」

なんか色々聞きたいことがあったが、やっぱりお人好しな僕。

「わかりました。やってもいいですよ」

あっさり答えてしまった。

どうも電話は苦手だ…

その後、大会の日時や場所、そしてルール等を事細かに説明された。

「…では当日9時まで集合ですね。…はい…はい、わかりました、失礼します」

と言って、僕は電話を切ってしまった。

とりあえず、なんとか休みを取って行くしかないかな…

そう思い、僕は少し小さなため息をした。

……大会当日……

僕は言われた通り、約束の9時に会場に来ていた。

大会本部に行き、更に詳しい説明を受けた。

鬼役の人は、他にも9人いるらしい。

とりあえず僕は、他の9人に軽い挨拶を済ませ、大会開始を待った。

現在午前10時

開会らしき物が始まり、僕は他の鬼の人達と一緒に、控え室で待機していた。

時折、司会者の声とは別に、怒号やブーイングが聞こえた。
何か恐いな…と少し不安になった。

現在午前11時

どうやら参加者は合図と同時に隠れ始めたようだ。
もちろん僕らにはその様子は見えていない。
皆軽い準備運動をして、出番を待った。

現在正午

甲高い笛の合図とほぼ同時に、係りの人が来た。
「皆さん出番です。お願いします」そう言われ僕らは外に出ていった。

かくれんぼなんていつ以来だろう…
まあ鬼より隠れる方が好きだったけどな。
と思いつつ、参加者を探し出した。

参加者とはいわゆるゼッケンを付けた人達だ。
まずは、自分なら何処に隠れるか考えた。
そして、さっき配られていた地図を見ながら、遠くにある公園を
指して走り出した。

狙いは2つ。
隠れる人は、「なるべく鬼から遠ざかりたい」と考えると思ったか
ら。

もう1つは、「公園に行くまでの間に、怪しい所は探していける」
と思ったからだ。

名付けて、

『1人ローラー作戦』

200人近く居ても、24時間あるのだ。
こっちは10人いる。

僕でも20人位なら見つけられるだろう、と少し樂觀視していた。

現在午後12時22分

…「あつ！」

あそこの物陰で何かが動いた気がした。

僕は自分の気配をなるべく消しながら、 ゆっくりと近づいた。

そして、素早く物陰を覗くと、不自然なダンボールの山。

まさか…

恐る恐るダンボールを持ち上げると、体を丸めてかがんでいる男性。

体にはゼツケンが。

……えつと確か…

「見いつけた！」

そう言つて男にタッチした。

そして、携帯を取りだし、本部にゼツケンの番号を伝えた。

やった！見つけられた！

浮かれる僕とは対照的に、明らかに不満顔な男性。

まるで僕が悪いみたいな雰囲気だ…

気まづくなり、僕はまた公園を目指し走り出した。

でも…なんか楽しくなってきた！

徐々にテンションも上がってきた。

少しずつだがコツをつかんできて、公園に着いた頃には、既に6人程見つけていた。

現在午後1時55分

ここにも怪しい場所がたくさんあった。

まずは、少しベンチの陰に置かれているゴミ箱。

中が空なら、人が隠れるには充分だ。

小走りで近づき、勢いよく蓋を開ける。

もう最初の時のような緊張感はない。

むしろワクワクしている僕がいた。

ガバツと開けると、中にいた人は少しビクツとしたのがわかった。その姿に何処か優越感を覚えたが、気付かれたらマズイと思い、毅然とした態度で本部に報告した。

午後2時13分

トイレの中で1人（個室はルール上禁止）、少し奥の木陰でもう1人見つけた。

僕が今まで見つけた人数は、9人。

さて次はどうしようかなーアドレナリンのせいか、走ったりして
るが、まだ疲労感は無かった。

現在午後3時13分

これでもかかっていうぐらい公園は調べ尽くした。

…もうここには用はないな。

僕は街中を探すことにした。

日没まではもはや数時間：今のうちになるべく見つけないと厳しく
なると思った。

現在午後5時35分

街中では路地裏や、物陰など意外な程多くの人を見つげられた。

多くの人の場合、走って逃げ出すが、こっちはマラソンの優勝経験
者だ。

逃げきれるはずもない。

驚異的な追い上げの甲斐あって、日が暮れる頃には20人超の人を
見つけていた。

暗くなってきたこともあり、一旦本部に戻ることにした。

本部に着くと他の鬼の人達も戻っていた。

現在午後6時

未だ見つかってないのは11人。
辺りはすっかり暗くなっていた。

係りの人の話では、夜は待機で良いとの事。

暗くで見つけられる可能性が低いことと、参加者の忍耐力を試すためだそうだ。

何だか少しかわいそうだと思ったが、半日走り回った疲労で、その日はすぐ眠りについた。

現在午前7時

足には少しだるさが残っていた。

それでも僕はまた走り出した。

他の鬼達と情報交換したが、大抵の場所は探し尽くしていた。
考えられることは、鬼に気付かれないように移動しているということだった。

と言うわけで、もう一度昨日の公園に行ってみることにした。

午前7時52分

公園の手前まで来たが、学生や、サラリーマンが多く歩いていた。

僕は辺りをキョロキョロしながら公園に近づいた。

………！

遠くの木陰から、ゼッケンを付けた人が走り出すのが見えた。

「いた！」

そう思わず口に出すと同時に、心の中では「やったあ！」と捕まえるのを確信した。

何せ僕から逃げきれた人は未だいないのだから。

そう思うと足のだるさも忘れ、全力で走り出した。

ところが、なかなか差が縮まらない…

それどころか、少し離されていくような気がする。

「ヤバイ…」

僕はこの大会で初めて焦っていた。

本気で走った。

プライドも肩書きも忘れ、がむしやりに走った。

街中まで来る頃には、差はだいぶ縮まった。

持久力ではやっぱり僕の勝ちだ。

ゼッケンを付けた人は、必死なのだろうか、こっちを振り返ろうともしない。

その人まで後10数メートルというところで、急に角を曲がり、路地裏に入ってしまった。

…見失う！

そう思い、慌てて路地裏に入ると、肩で息をする男の人。

どうやら、僕が後ろにいることに気づいてないらしい。

肩をそつと叩くと、その人が固まるのがわかった。

「見つけた！」

113番を付けたその男性は、呆然としている。

僕はいつもと同じ様に、本部に連絡した。

どうやら未だ見つかっていなかった人は、彼を入れて3人だけだったらしい。

「惜しかったね。あなたを入れて後3人だったんですよ」

僕は初めて見つけた人に声を掛けた。

それは、称賛とねぎらいのつもりだったが、彼は上の空だった。

現在午前10時5分

残りの2人を探しに向かった。

途中でもう1人見つけたとの連絡を受けた。

…後1人。

しかし、その後1人がどこを探してもいない。
隠れてると言うより、本当にいないんじゃないかと思うくらいだった。

現在正午

ついに見つけられなかった。

結局僕達鬼は、1人の人を残すことになってしまった。

本部に戻るともう表彰式が始まっていた。

…ということは、最後の人は、意外と近くにいたのか……
ちよっと悔しかった。

「でもまあいつか」

熱くワクワクした日を過ごせて、少し満足していた。

それに、この大会で僕は、少し自分に自信が持てた気がした。

今なら、変な勧誘の電話だろうが、訪問販売だろうが、キッパリ断れる。

もう僕はお人好しじゃない。

「よし！疲れたから帰って寝よ」

僕はゆっくりと家路に着いた。

…1週間後

僕のもとに全国大会の案内状が届いた。僕が1番多くの参加者を見つけた鬼らしく、是非また鬼をやって下さいとの事…

少し笑って僕は思った。

「やっぱり断れないや」

（後書き）

前作が処女作だったので、少しは上達してたでしょうか？

余談ですが、実はかくれんぼの大会は、本当に日本で開かれているみたいです。

勉強不足で今日まで知りませんでした。
申し訳ないです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0131p/>

かくれんぼ(鬼の男編)

2010年11月20日01時43分発行